昭

三年　画数 9　筆順 日 昭 昭　オン ショウ　クン

成り立ち

とのさまが「刀を」といって、けらいを〝召す（よびよせる）〟ことをあらわした〝召〟と〝日〟とを組み合わせて作った字で、「日の光をまねきいれて〝あかるくする〟」ことをあらわしたものです。〝あかるくする〟ことや、〝あかるい〟こと。

また、「世の中が〝あかるい〟」といういみで、「世の中がよく〝おさまる〟」→〝平和〟のいみにつかわれます。

例 昭代、昭和。

使い方

▽昭和が終わり、「平成」と元号が変わりました。

▽昭和時代は、二度の世界大戦があり、まさに激動の時代でした。

熟語例

▽昭昭（日の光がかがやいて、明るいこと。また、はっきりと明らかなこと。）

▽昭代（政治が良く行われ、世の中がおさまって、平和な時代。「まれに見る昭代」などというふうに、つかいます。）

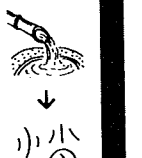
▽昭和（世の中がよくおさまり、平和でありますように、という願いを込めて、つけられた元号）

▽昭和時代（昭和天皇が天皇の位にあった昭和元年から昭和六四年までのおよそ六十年間の時代のことをいいます。天皇の元号にしたがって、大正時代、明治時代などといいます。）

消

三年　画数 10　筆順 氵 氵 消 消　オン ショウ　クン きえる・けす

成り立ち



「肉が小さい」といういみの字で、「ものが小さくなること」をあらわした〝肖〟と〝氵〟とを組み合わせて作った字で、「水のながれが小さくなる」→「水がなくなる」ことをあらわしたものです。

しかし、今では、「ものがなくなる（きえる）」といういみにつかわれています。

また、「なくす（けす）」といういみにもつかわれます。

〔消は、「水の流れが細くなり、〝勢いが弱まる〟」ことを表した字で、〝勢いが弱まる〟が本義である。水が〝尽きる〟ことから、〝なくなる〟意味に用いられるようになった。〝けす〟は〝きえす〟の変化したものである。移る→移す、消える→消す〕

使い方

▽あかりが消えると、あとはまっくらやみになりました。

▽近所に火事がありました。消防自動車がやって来て、火を消しとめました。

熟語例

▽消防（火事を消し、火事を防ぐこと。）

▽消火（火を消すこと。火事を消すこと。「消火器をそなえていない家は、近ごろでは、めったになくなりました」などというふうに、つかいます。）

▽消毒（毒を消すこと。傷口などについた、ばいきんを殺すこと。「けがをした時には、傷口をよく消毒しておかなければ、いけません」などというふうに、つかいます。）

▽消燈（あかりを消すこと。「消燈したあとは、おしゃべりをしないで、すぐに寝込みました」などというふうに、つかいます。）

▽消失（消え失せること。なくなること。「消失した百万円は、二度と見つからなかった」などというふうに、つかいます。）